

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 6 日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26885097

研究課題名(和文)多様な近代観による新たな社会構想の基礎付け：20世紀前半のイタリア思想の事例から

研究課題名(英文)Other Possibilities of Building Modern Society: the Italian Cases in the Early 20th Century

研究代表者

千野 貴裕 (Chino, Takahiro)

早稲田大学・政治経済学術院・助教

研究者番号：00732637

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、20世紀前半のイタリアを代表する三人の思想家(クローチェ、グラムシ、ゴベッティ)が、「近代の完成」を主張するファシズムに対して、ファシズムとは異なる「近代」の概念を用いつつ、可能かつ実現していない多様な社会構想を基礎付けようとしたかを研究するものである。三人の思想家の近代観と社会構想を研究した現在までの成果は、一本の邦語論文、二冊の邦語共著、二冊の英語共著等にまとめることができた。

研究成果の概要(英文)：This study looks at how three eminent thinkers in the early 20th century, Croce, Gramsci and Gobetti, elaborated alternatives to the existing society, drawing on various views of modernity against the fascists' understanding of themselves as the culmination of modernity. The upshots of research I have conducted so far have been published or are forthcoming as follows: one article in Japanese (peer reviewed), two chapter contributions in Japanese, and two chapter contributions in English.

研究分野：政治思想史(19-20世紀イタリアを中心に)・政治理論

キーワード：政治学 思想史 イタリア思想

1. 研究開始当初の背景

申請者は A・グラムシの研究を博士論文にまとめるなか、申請者は、グラムシを含む同時代のイタリアの思想家たちが「近代」概念を実に多様に解釈していたことに気がついた。具体的には、以下の二つの背景がある。

(1) 未完のイタリア国家探求の鍵概念としての「近代」

ファシズム支配のなか、G・ジェンティレらの理論家はファシズムが「近代の完成」であると喧伝した。B・クローチェ、グラムシ、P・ゴベッティは共通してこの理解に反対するものの、彼ら自身の近代理解はそれぞれ、相当に異なっていた。ここで重要なことは、彼らが、この異なる近代理解に依りつつ、それぞれのイタリア「近代」国家構想、つまりファシズムによって実現はしていないが可能であった国家構想を提示したことである。

(2) グローバルな視野からの「近代」の再検討

さらに、政治理論や歴史学の方面では、「近代」概念はグローバル化とともに重要な検討課題となってきた。W・キムリッカやB・パレークら多文化主義者は、多様な文化を抑圧する抑圧的モデルを近代に見た。同様に、S・ハンチントンやZ・シュテルネルらは近代を単線的な発展的モデルとして捉えた。この反対に、S・アイゼンシュタットは「近代」が地域や時代において多様な形態をもっていたことを指摘した。しかしながら、近代が実際にどのように多様であったのかに関する研究はほとんどなされていなかった。

2. 研究の目的

「近代」は、グローバル化した現代においてその位置づけが問われている概念である。近年、近代は多様性を抑圧し、特定の発展モデルを強制してきた概念であると批判されている。しかし、この批判は、近代の概念が果たしてきた、多様な社会構想を惹起する役割を見逃している。この研究は、1920-30年代という「近代」が疑問に付された時代に、イタリアの主要思想家たちが、「近代」の概念を通じてそれぞれの多様な社会構想を基礎付けようとしていたことを明らかにする。つまり、クローチェ、グラムシ、ゴベッティのそれぞれが、どのようにファシスト的「近代」を批判し、どのような「近代」観をもち、それぞれの「あるべき」イタリア国家像を対置したのかという問いを明らかにしたい。さらに本研究は、イタリアと日本の思想家による多様な「近代」観とそれに基づいた社会構想というグローバルな視野をもった「グローバル政治思想史」(2016年度より開始の日本学術振興会特別研究員奨励費による研究)とすることを企図している。

3. 研究の方法

本研究に先立って行っていた研究から、申請者は、三者は異なる近代理解を示しつつも、共通して「近代」を肯定的に捉えていたと考えられた。彼らは「近代」を鍵概念として用いつつ、現実のファシスト・イタリアとは異なるイタリア国家の可能性に光を当てようとしていたことが看守された。ここから浮かび上がったのが、本研究によって研究されるべき三つの論点である。これらの論点に関して三人の思想家がどのように異なる理解を提出していたかを比較検討する。

(1) 第一点は、彼らがイタリア「近代」国家の成立をどのように捉えるかということである。イタリアの統一を成功と捉える(クローチェ)か、失敗と捉える(グラムシ、ゴベッティ)によって、「近代」国家の役割の理解が変わってくる。この点を明らかにするため、三人の思想家がイタリア統一をどのように叙述したかを比較検討する。

(2) 第二に、イタリア民衆の位置づけ、なかんずく南北の格差(「南部問題」)をどのように捉えるかである。南部問題は、統一後のイタリア政府の政策やその背後にある南部への偏見によって、むしろ増幅されたとの指摘も当時からなされている。したがって、南部問題をどのように捉えるかを調べることで、近代国家が国民包摂をどのように行うべきかの規範を理解できるだろう。

(3) 第三に、宗教、とくにカトリック教の位置づけである。三者ともにカトリック教を批判したが、その理路は相当に異なっている。ローマなどの旧教皇庁領がイタリア国家によって占領されたこともあり、統一直後からカトリック教会はイタリア国家を承認せず、信者には国政選挙の棄権などを促していた。したがって、カトリック教会に対抗してどのような国民的道徳を創造するかは、統一以来のイタリアの思想家たちが広く共有した問題であると言える。

4. 研究成果

クローチェとグラムシの近代観と社会構想については論文にまとめることができた。

まずクローチェに関して、1)ヘゲモニーの語はグラムシのものとして有名であるが、グラムシが初めて使った言葉ではなく、当時多くの思想家が用いていた。そのなかで、クローチェによるヘゲモニーの語の使用法は、グラムシに先立った用法、つまり、リソルジメント期の国際関係におけるある国や地域の力という意味のもっとも洗練された形態であると考えられることが分かった。現在この研究は英語論文にまとめている。

2) また、クローチェによる現状の国家批判、なかんずくファシズム国家の批判は、「自由の発展史」として理解されたイタリア史を叙述することから導出されている。つまり、自由の発展に貢献するものはイタリアの正統な歴史とされるが、それを阻害するものは

その妥当性を批判されるのである。近年、歴史叙述の政治的意味の研究が英語圏で注目を集めていることもあり、この論点をまとめた英語論文はトップジャーナルに投稿する予定である（上記二点とも、イタリア近代国家の成立の問題に関わる）。

次にグラムシに関しては、数本の論文を刊行（あるいは刊行予定）にすることができた。

1) グラムシによると、南部人が「自然」的に劣等であるという考え方が科学的に正当化された結果、イタリアの近代国家形成において南部大衆を排除しあるいは劣位におく考え方もまた正当化された。この論点は、拙稿「『自然』であるという表象」姜尚中・齋藤純一編『逆光の政治哲学』法律文化社、2016年と、「グラムシ」土肥秀行・山手昌樹編『教養のイタリア近現代史』ミネルヴァ書房、2016年（近刊）において論じた。

2) グラムシは、近代国家の編成を分析することによって、強制力（暴力）のみでなく、民衆から得られる同意（狭義のヘゲモニー）によってこそ近代国家は維持されていることを論じた。しかし、他方で彼は、階級が存在しない未来社会の構想も提出している。彼はこの二つの構想を「倫理国家」という整理されない概念によって展開しているが、二つの構想の間には断絶があると考えられる。近代国家・イタリアにおいて社会的流動性の低さを問題視するグラムシは教育改革を含む社会構想を行った。そこでの要諦は、支配する政治階級と支配される大衆の二分法を前提としつつも、その編成は流動化させることができるし、また現状のイタリア国家に対抗して、大衆を潜在的エリートとして位置づける流動性の確保が重要であるということであった。しかし、未来社会の構想においては、前者の前提となっていたこの二分法自体が消滅しているため、「倫理国家」というひとつの概念で述べられているにも拘らず、グラムシの「近代国家の分析」と「未来社会の予測」には乖離があると言える。この論点は、拙稿「グラムシにおける二つの倫理国家概念：現代社会の分析と未来社会の予測」『社会思想史研究』(40)、2016年11月刊行にて展開した。今後は、彼の議論の哲学的背景となっているマルクス主義の分析も行う必要を感じている。

3) さらに、グラムシの宗教論に関して二冊の英語共著書が刊行予定である。（“Religion, Common Sense, and Good Sense”, *Past and Present: New Insights into Gramsci's Philosophical, Historical, and Political Thought*, eds. F. Antonini et al., Leiden: Brill, 2016年刊行予定と、“Gramsci and Religion: An Overview”, *Gramsci on Religion: Text and Context*, ed. C. Zene, Milan: Mimesis, 2017年4月刊行予定）。グラムシのカトリック教会論は様々な論点に及ぶため、今後も検討を続けて行く予定である。

とりわけ、カトリック内部のリベラル派を一時期彼は評価するにも拘らず、遺著となった『獄中ノート』ではほとんどこうした肯定的評価が見られなくなる。この点は、イタリアにおけるリベラル・カトリシズムがフランスなどと比較して弱体化されていたことと関連して研究が必要であると思われる。

最後に、ゴベッティについては、二次文献の量が予想以上に膨大であり、文献の読解に終始している段階である。今後、南部問題論や自由主義論に絞った形で、彼の「近代」論をまとめる予定である。時間がかかったが、今後論文にまとめる予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計1件)

1) 千野豊裕「グラムシにおける二つの倫理国家概念：現代社会の分析と未来社会の予測」『社会思想史研究』(40)、2016年11月刊行、査読あり。

〔学会発表〕(計4件)

1) Chino, T. “Religion and Common Sense: Gramsci's Critique of the Catholic Church”, *Past & Present: Philosophy, Politics and History in the Thought of Gramsci*, King's College London, London (UK), 18 June 2015.

2) Chino, T. “Marxism in the ‘Periphery’: the Cases of Italian and Japanese Marxists”, *9th Social Issues for Social Sciences Conference*, European University Institute, Florence (Italy), 11 June 2015.

3) Chino, T. “Gramsci and Tosaka: Common Sense, Religion and Politics”, *Religion, Nationalism, and Secularism in Political Modernities*, International Christian University, Tokyo (Japan), 23 December 2014.

4) 千野豊裕「グラムシにおける二つの『倫理国家』概念：『完全な国家』と『規制された社会』」第39回社会思想史学会、明治大学（東京）、2014年10月25日。

〔図書〕(計4件)

1) Chino, T. “Gramsci and Religion: An Overview”, *Gramsci on Religion: Text and Context*, ed. C. Zene, Milan: Mimesis, 2017年4月刊行予定。

2) Chino, T. “Religion, Common Sense, and Good Sense”, *Past and Present: New Insights into Gramsci's Philosophical, Historical, and*

Political Thought, eds. F. Antonini *et al.*,
Leiden: Brill, 2016 年 11 月刊行予定。

3) 千野貴裕「グラムシ」『教養のイタリア
近現代史』土肥秀行・山手昌樹編、ミネル
ヴァ書房、2016 年 9 月刊行予定。

4) 千野貴裕『自然』であるという表象 グ
ラムシ：自然的劣等の問題化』『逆光の政治
哲学』姜尚中・齋藤純一編、法律文化社、
pp.97-113、2016 年。

〔産業財産権〕
出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

千野 貴裕 (CHINO Takahiro)
早稲田大学 政治経済学術院 助教

研究者番号：00732637

(2) 研究分担者

なし
()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし
()

研究者番号：